

小さな訪問者たち

四棟から成るデリー大学の女子学生寮(University Hostel for Women)で私に割り当てられた部屋は、一番端の建物、事務所のある最上階(二階)にあつた。大学構内には、高い建築物はほとんどなく、見晴らしは抜群だった。屋上に上ると視界はぐつと広がり、豊かな緑の中に建物が見え隠れするのが、はるか遠くまで眺めることができた。

毎日毎日、この雄大な景色に接していると、いつしか気持ちまでゆったりとしてくるようであ

あつた。日没頃の一時、朱色の空を背景に大樹と、空が一瞬真黒になるかと思われるほどの鳥たちの各群れが、ねぐらを求めて飛び交うシリエットの美しさは、その鳴き声のにぎやかさと共に、映画の一つの場面のように鮮明に脳裏に焼き付いている。

前庭には、二階のベランダに届きそうな大きなニームの木(インドセンダン)が青々と繁り、鮮やかな青緑色をしたのんびり屋のオウムと元気なシマリスの根城になつていた。都市部のデ



東方研究会専任研究員
清水晶子



リードでも、人の住む身近な所にこれらの動物を常に見ることができた。

野生のリスは、敏捷で活発な動物である。少しの間もじつとしている。ニームの木を縦横に駆けめぐる。インドに来てはじめて、リスが鳴き声を出すことを知った。キュツキュツというかん高い声を発する。突然足で立つて、真黒のくりつとした瞳であたりを警戒するようなしぐさは、愛嬌たっぷりだった。

あるキャンティーン（青空喫茶店）のそばにいたリスなどは、人に慣れていて、直接手からスナック菓子をもらつていつたりする。そのニームの木によくやつてくるカラスの一

団がいた。試しに、毎朝パンのみみをベランダの手すりに置いてみた。しばらくして、好奇心の強い数羽のカラスが、それを食べるようになつた。朝食後八時半頃、決まってカラスたちはニームの木に集まつて来る。ルームメイトのラ

タがベランダに出ても、そつけない態度。私が出て行くとカアカアとかまびすしい催促の声が出る。カラスは言われているように、本当に人を識別することができるのだろうか。

インドのカラスは、甘いお菓子よりもナムキン（カレー味のスナック菓子）の方がお好みだつた。首の部分が灰色で、口ばしも日本のカラスよりもずっと細くて小さい。体も小柄である。インドでもあまり好まれる動物ではないようで、ラタは私がカラスにエサをやることに、最初は驚いている様子だつたが、次第に「あなたのお友達が来てるわよ」と言つて、からかうようになつた。

何度も要求の手紙を書いた末、五ヶ月経つてようやく、ラタにも私にも一人部屋が与えられることになった。この部屋に移つてから、一匹の白猫が私の新たな友人になつた。

寮には、猫の家族が住みついていた。食堂か

ら残り物が出るので、使用人たちがそれを食べさせているらしかった。当然とはいえ、インドの猫は香辛料のきいたカレー料理を食べる。

白い猫をキヤンティーンで見かけた時、食べ物をやつたりしていたのが、いつのまにか部屋までついて来るようになった。それで、毎朝食堂で配給される紅茶用の牛乳を与えることにした。「シロ」と名前をつけて、部屋には入らないように躊躇した。隣室のチットラから嫌がられることもなく、戸口の前でいつもおななしく座つて待っていた。

チットラによれば、シロは、私が二週間の南インド旅行に出かけていた間、毎朝待つていたそうである。帰つてみると、シロは寮からいなくなっていた。それ以来、一度も姿を見かけなかつた。

インドでは、ペットを飼っている人の数は非常に少ない。それも私の知る限りでは、犬だけ



チットラによれば、シロは、私が二週間の南インド旅行に出かけていた間、毎朝待つていたそうである。帰つてみると、シロは寮からいなくなっていた。それ以来、一度も姿を見かけなかつた。

インドでは、ペットを飼っている人の数は非常に少ない。それも私の知る限りでは、犬だけ

公のラーマ王子を援助する勇気と知恵を具えた、人々に人気のある神様である。

ところが、大学街の近くにある丘陵からやつて来る猿たちは、なかなか厄介であった。彼らのお目当ては、食べ物である。開け放した窓から侵入して、果物やスナック菓子を失敬していく。食べ物がなかつた場合には、部屋中めちゃめちゃにされたりするという。

私も一度、外出中に干していった蒲団に手（足？）形が残っていたことがあった。もう一度は、隣のベランダづたいに逃げて来た猿とたまたまハチ合わせした。必死の思いで、そばにあつたほうきをつかみ大声をあげた。幸いにも、それ以降は被害にあうことはなかった。猿の方

も、抵抗あるいは攻撃を受けた部屋には、二度と近づかないということだった。単なる悪戯のつもりかどうかなのか、わからない。猿に襲われた話も聞いた。

この場合、動物と人間の生活する距離が近すぎて、起ころる事なのかも知れない。猿にはどうも親しみを感じられなかつた。

インドでは、動物をペットのように可愛がるという感情は、存在しないのではないかという印象を持った。輪廻転生を信ずる人々にとつて、動物も同じ生物として、人間と同じ枠組でとらえられているのではないだろうか。生前のカルマ（業）の如何によつては、来世に動物として再生する可能性だつてあり得る。

愛玩用として動物を飼うというのも、人間と動物とははつきり異なるもの、人間の方が、動物より優るものとして考えられているから、成り立つ関係ではないかと思われた。

インドでは、サンサーラ（現世）で生きていくことは、動物であつても、カースト制度に束縛される人間であつても、ある意味では同じことなのかもしれない。